

文久山高炉に熱視線

一関市大東町鳥海の市之通地区で文久年間(1861〜64年)に操業した仙台藩初の洋式高炉、文久山高炉に地域の関心が高まっている。世界遺産に登録された、現存する国内最古の洋式高炉跡「橋野高炉跡(釜石市)」から数年後に建設され、1887年まで操業したとされる。29日は児童らが跡地を見学し、近代製鉄の発展に貢献した文化遺産として価値を見つめ直した。

一関・大東



文久山高炉跡地周辺を見学する地元の児童

仙台藩初の洋式高炉跡地で学習会開催

文久山高炉は同市大東町浜民出身の芦文十郎(1812〜73年)が開設。一帯には高炉や小屋が並び、月に45トンを生産し、近隣のくわ鍛冶師や鋳物師、石巻の鋳銭場などに送られたとされる。「橋野鉄鉱山・高炉跡」の世界遺産登録を受け同じ時期に独自の技術導入で20年以上製鉄を行った文久山高炉にも光を当てようと、大東図書館は企画展を8月8日まで開催。同高炉が使われた「こしき炉」の一部や関連資料を展示している。



文久山高炉に関するこしき炉や鉄鉱石が並ぶ大東図書館の企画展



29日には大東地域の市民センターが「学びの土曜塾」として現地での学習会を企画。児童14人が、高炉跡地とその後に京津畑地区に建設された文久新山高炉の跡地を見学した。岩淵翔生君(大東小4年)は「山の中で鉄をたくさんつくっていたことに驚いた」、伊東若菜さん(興田小4年)は「昔の大東はすごい鉄の町だったかも」と想像を巡らせた。

案内した芦東山記念館の小林浩之業務推進員は「日本が近代製鉄の実験を繰り返していた時期の重要度の高い高炉」と価値を強調。大東地域でたたら製鉄を伝承する「ホッパの会」の勝部欣一事務局長(69)も同行し「釜石」と同時期に大東でも新たな製鉄技術が取り入れられていた。現存すれば世界遺産に匹敵する価値があったのではないかと。みんなで価値を確認していきたい」と認識を新たにしたい。

芦文十郎と文久山高炉 大東地域は砂鉄産地で、たたら製鉄が盛んに行われていた。芦家も砂鉄の精錬を営み、くわや鎌などの問屋も兼業していた。「東山鉄山下代」という役人を務めていた文十郎は藩から鉄の増産を命じられ、自宅庭に実験高炉を造るなど試行錯誤を経て、本格的な高炉製鉄を開始。市之通地区は▽餅鉄産地に近い▽送風などに使う水車の動力となる水利が良い▽燃料となる木炭生産用の材木が豊富などの条件がそろっていた。